

私のネクストステージ

—退職者への質問状—

Vol.53



62歳で飛び込んだ保育業界で 保育士をサポート



ソラスト前野町保育園 保育補助／元会社員

相澤 肯英さん (70歳) 2014年定年退職

【あいざわ・こうえい】1954年、東京都出身。大学卒業後、外資系製薬会社に就職し、MR（医薬情報担当者）として定年まで勤め上げる。62歳で保育補助として働き始め今年で8年目。プライベートでは総合格闘技である日本拳法の道場で指導を行うほか、愛犬のドッグショー出場を夫婦共通の趣味としている。

—相澤さんは現在、東京都内にある保育園で「グランドシッター」とも呼ばれる保育補助として勤務されていますが、保育の仕事に就くきっかけは何だったのですか。

現役時代、私は外資系製薬会社で営業の仕事をしていました。早朝から深夜まで働くのが当たり前で毎日仕事漬けだったので、60歳まで勤めればもういいだろうと、定年を区切りに退職することにしました。

退職後は個人事業主として人材紹介業をやってみたのですが、うまくいかず、遊んで暮らすような日々を送っていました。妻に「毎日遊んでばかりで、いい加減にして」と言われても、積極的な求職活動はしていませんでした。

定年から1年半くらい経った頃、テレビ番組で、ある団体が定年後の男性をメインに、保育補助の研修を行う様子が紹介されていたんです。自分と同年代の男性たちが研修を受ける姿を見て、面白そうだなと。さっそく研修を行っている団体に問い合わせ、受講することにしました。

—どのような研修だったのですか。

「グランドシッター養成講座」と名付けられた有料の研修で、保育補助をするために必要な知識やスキルとして、子どもの発育と保育に関する座学と、おむつの替え方や抱っこ仕方、読み聞かせの仕方、どうやって遊ばせるかといった実技を2日間で学ぶという内容でした。

私は二期生として受講しましたが、その中には駐在員として海外を渡り歩いていた人や会社役員だった人など様々な人が10名程いましたね。

—研修後は、どうされたのですか。

最初は、人づてに紹介してもらった認可外保育園で働くことにしました。週2日、午前中だけのパートタイム勤務です。

保育補助は保育士さんの補助という立場で、食事の世話やおむつ替えをしたり、お散歩に連れていったり、お昼寝をさせたりします。まだまだ手がかかる乳幼児たちを保育士さんは何人も受け持っています。身の回りの世話をしながら、体調や行動をチェックしたり、生活習慣を身につけさせたり、集団生活のルールを教えたりしています。季節の行事や催し物も多く、その飾りつけもすべて手作りです。そのように多くの仕事を抱えている保育士さんをサポートするのが、保育補助の仕事です。

—育児に関しては、ご自分のお子さんでの経験があったのですか。

子どもは2人いますが、育児は妻に任せ切りで、ほとんど関わっていませんでした。ただ、私は総合格闘技の道場で長年教えているので、子どもと接することには慣れていました。保育補助として子どもと関わることは楽しかったですし、火曜・水曜の午前中だけの勤務だったので、時間的にも体力的にも余裕がありました。

それで、せっかくだからいろんな保育園で働いてみようよと、木曜・金曜の午前中は認証保育園、夕方2時間は公立保育園と、掛け持ちで働くことにしました。

——夕方だけの勤務もあるのですね。

夕方は保護者がお迎えに来る時間帯で、保育士さんは子どもに関する伝達事項など保護者と話すことが多く、子どもへの目が行き届かないことがあります。そこをサポートして、子どもたちの帰りの準備を手伝ったり、ケガしないよう見守ったりするの
が、保育補助の役割でした。

——「ブランドシッター養成講座」の受講者の中で、就職された方は何名いたのですか。

私と同じ二期生の中では、私ともう一人女性がいましたが、一期生では一人もいなかったそうです。というのも、私が研修を受けた約7年前は、ハローワークで仕事を探しても「男性でしょ？ 60歳過ぎでしょ？



子どもを男性が抱いている様子。相澤さんは男性が抱いている様子を見て、子どもが抱かれる効果も大きいと感じています。



子どもたちが教える様子。相澤さんは子どもが教える様子を見て、子どもが教える効果も大きいと感じています。

保育補助の仕事なんてないですよ」と一蹴されるような状況で、保育補助は若い女性の仕事という既成概念がありました。

ですが、今、その状況は一変しています。「ブランドシッター養成講座」を受けた後、実際保育園での仕事に就いた人は、200名はいるんじゃないかと。

私が現在勤めている保育園もハローワークで見つけましたし、人手が足りない保育園は多いはずです。求人票には「保育補助」の募集が載っていないなかったとしても、直接問い合わせる条件が合えば、雇用してくれることも少なくないようですから。

——そういう見つけ方もあるのですね。シニアが保育補助の仕事をする際、気をつけなければならぬことは何でしょうか。

私は現在、「ブランドシッター養成講座」で講師も務めています。受講者には「保育園ではあくまでも補助という立場ですよ」ということを必ず伝えていきます。会社で取締役や管理職をしていた方もいますが、「そんな肩書は保育園では何の役にも立ちません。自分の娘と同年代の保育士さんの指示には、はいと従えなければ、務まらない仕事ですよ」と。

私自身、管理職だった頃は自分にも部下にも厳しく、社内では怖がられていたと思います。ですが、保育の世界で働く以上、自分の立場と役割をしっかりと認識し、保育士さんのサポートに徹しています。

——保育補助として働くシニアには、どんな方がいらつしゃいますか。

生活のために働きたい人もいれば、孫の育児に関わったことがきっかけで保育士さんを手伝いたいと思ったという人もいます。60歳を過ぎて保育士の国家資格を取得し、保育士になった人もいます。非常勤である保育補助と常勤の保育士は給料面でかなり違いますから、収入を考えれば資格を取ったほうがいいのかもしれない。

——相澤さんが保育園の子どもたちと接する上で、心掛けていることは何ですか。

まずは子どもの目線になるということ。まだ言葉がはつきりせず、何を言っているかわからないことも多いですが、しっかりと耳を傾けて聞くようにしています。それから、子どもたちの体調の変化も見逃さないように心掛けています。

——最後に、相澤さんにとつての保育補助の仕事のやりがいを見せてください。

人間が一番成長する時期に関わって、その変化を見られることです。寝るか泣くかだった0歳の赤ちゃんが、生意気なことを言えるくらい成長して卒園していく過程を見られることが嬉しい。子どもたちにとつて、私はおじいちゃんのような存在でしょうが、彼らが大人になった時「保育園にあらんな人がいたな」と、少しでも思い出してくれたら十分です。シニアと接することも、子どもには必要じゃないかと思っています。